

平安時代中期における『萬葉集』伝来の一様相

——西本願寺本『赤人集』の形態を徴証として——

池 原 陽 斉

はじめに

平安時代、特に院政期以前における『萬葉集』の伝来、流布に関しては、現在でも不明な点が多い。その理由としては、院政期のごく初期、寛治年間（一〇八七〜九四）に書写された元暦校本¹以前の『萬葉集』伝本が総じて現存する巻の少ない零本であること、また萬葉歌を引用する歌論書なども、この時期以降にまとめられたものがほとんどで、十二世紀以前のありようをつたえる材料が少ないことなどがあげられる。

その点、入集歌の詠歌年代からみて『拾遺集』成立以前に編纂されたとおぼしい『古今和歌六帖』²や、同時期には成立していたとみられる『人麿集』³、『赤人集』⁴、『家持集』といった萬葉歌人の名を冠した私家集は、多くの萬葉歌を

採取しており、平安時代中期の『萬葉集』の伝来、流布を考えるうえで重要な資料といっている。本稿ではこれら平安時代中期の歌集のうち、『赤人集』を検討対象とする。

まずは『赤人集』に関する基本事項を確認しておきたい。本集は、現在以下の三系統に区分するのが一般的となっている。⁵

第一類本 西本願寺本系 西本願寺本蔵三十六人集⁶あ

か人⁷ 三五四首

第二類本 正保版本歌仙歌集本系⁸ 書陵部蔵（五一

〇・一二）『赤人集』 二五一首

第三類本 陽明文庫本系 陽明文庫蔵三十六人集⁹（サ・

六八）『赤人集』 二四一首

諸本間の異同は少なくないが、共通の祖本から派生したであろうことは、三本がそろって以下の特徴を具備してい

る点から察することができる。⁽⁶⁾

1、『萬葉集』卷十前半部（一八一二～二〇九二）に相当する仮名書き歌集であり、脱落は多いものの、題詞、左注等もふくめ、ほぼ『萬葉集』とおなじ排列をもつ。

2、三本共通の大きな脱落箇所（一八九一～九九番相当歌など）がある。

3、一九六〇、六一番相当歌が一首に誤認されている。

4、一九三六、三七番相当歌の間に『萬葉集』の現存諸本にみえない一首がある。しかも当該歌の詞書「たとへうた」に相当する「譬喩歌」という題詞が、元暦校本代赭書入、紀州本、廣瀬本にあり、元暦校本目録にも記載のあることからみて、『萬葉集』からの脱落歌である可能性がたかい。

この四点から推して、三系統の共通祖本は『萬葉集』卷十の前半部自体か、あるいは前半部を抜き出した抄本であり、それを仮名歌集に仕立てたものが『赤人集』であると判断できる。しかも4の脱落歌の存在は、『赤人集』が現存『萬葉集』以前の姿を、部分的とはいえ、つたえていることを示唆する。なお、西本願寺本のみ歌数が百首以上多いが、これは同本が『大江千里集』と合冊されている（巻頭から一一六番歌までが『千里集』、一一七番歌以降が巻

十相当歌群）ため、この点については二節で詳述する。

さて、以上の概略をふまえて本稿で検討したいのは、その『赤人集』祖本がどのような形態で伝来されていたのか、という点である。現在、『赤人集』祖本を真名本とみる山崎節子の説⁽⁸⁾が通用しているが、この理解の妥当性を検証するとともに、三系統のうち西本願寺本の特異な形態に注目することで、『赤人集』、ひいては平安時代中期における『萬葉集』の伝来、流布の一端をあきらかにしたい。

一 『赤人集』三系統の共通本文

まずは、『赤人集』祖本が真名表記で伝来されていたと推定する山崎説の根拠を確認しておきたい。具体例として二首引用し、説明をくわえる。

①風交 雪者零乍 然為蟹 霞田菜引 春去尔来

（萬葉集・一八三六）

②寒過 暖来良思 朝烏指 湊鹿能山尔 霞輕引

（萬葉集・一八四四）

①に相当する赤人集歌の上二句は、西本願寺本（一三）五）に「ふ、きつ、ゆきはふりつ、」、書陵部本（一八）に「風ませにゆきはふりつ、」とあり、大きく相違している。山崎はその理由を以下のように述べる。

現在、初句は普通「カゼマジリ」と読まれているが、

「校本万葉集」によると書陵部本と同じ、『類「かせませに」神「カセマセニ」』の例がある。問題は西本願寺本の例であるが、これも第二句との関連から大いにあり得るといえよう。(傍線原文ママ)

また、②に相当する赤人集歌の第四句は、西本願寺本(一四二)に「しかの山へに」、書陵部本(二五)に「かすかの山に」とあり、やはり別の句かと見紛うほど歌詞が異なっているが、山崎はその事情を次のように説明する。

万葉集の第四句は他の歌との比較上からも「カスカノヤマニ」と訓ずべきであろう。だが、「春日の山」を指すこの表記が他に例のないものであり、「滓」の音が「シ」である以上「シカ」と訓ずる可能性は大である。

氏は、以上のように『赤人集』の本文異同の要因を真名本の訓みわけにもとめ、このような訓みわけがなされている以上、現在の三系統以前の段階において、『赤人集』は真名本であった可能性がたかいたと推定する。

たしかに、右のような例から訓みわけがなされたと思定することも可能ではあろう。しかし右の例であれば、書陵部本の本文が比較的『萬葉集』の漢字に忠実な点を考慮すると、西本願寺本系の本文を『萬葉集』などの別資料によつて、部分的に校訂したものが書陵部系の本文であると

考えられないでもない⁽¹⁰⁾。

実際、『赤人集』三系統の本文をつぶさに検討すると、『赤人集』が一定期間真名本として存在し、それが別個に訓みわけられた結果、現在ののような本文異同が生まれたとは考えにくい例が散見しているのである。以下丸数字で萬葉歌を、その後に萬葉歌と対応する各系統の赤人集歌(西本願寺本は「西」、書陵部本は「書」、陽明文庫本は「陽」とそれぞれ略記する)を揭示し、具体的に検証する。

③ 足日本之 山間照 櫻花 是春雨尔 散去鳴

(萬葉集・一八六四)

あしひきのやまのはてらすさくらはな このはるさへにちりにけるかな

(西・一五五)

あし曳のやまのはてらすさくらはな このはるさめに散にけるかな

(書・三七)

あしひきの山のはてらす桜花 この春さへもちりぬ

(陽・四五)

④ 姫部思 咲野尔生 白管自 不知事以 所言之吾背

(萬葉集・一九〇五)

をみなへしさくのへにおふるしらつ、し しらぬこと

(西・一八八)

をみなへしさくのへにおふるしつ、し しらぬこと

(書・六九)

おみなへしこさく野へにおふるしらつ、し しらぬこ
もていひしわかこと (陽・七六)

⑤紫之 根延横野之 春野庭 君乎懸管 鶯名雲

(萬葉集・一八二五)

むらさきのねはひよちよのはるののに きみをこひ
けるうくひすそなく (西・二二六)

むらさきのねひよちよのはるの、に きみをこひ
つ、うくひすそなく (書・九)

むらさきのねはひて千よの春の、に きみをこひ
つ、鶯そ鳴 (陽・一二)

⑥天漢 安川原 定而 神競者 磨待無

(萬葉集・二〇三三)

あまのかはやすのかはらにさたまりて かゝるわか
れはとくとまたなん (西・二九七)

あまのかはやすのかはらにさたまりて かゝるわか
れはとくとまたなむ (書・一七七)

あまの河やすのかはらのさたまりて かゝるわか
れはとくとまたなむ (陽・一九二)

⑦玉蜻 夕去来者 佐豆人之 弓月我高荷 霞霏霏

(萬葉集・一八一六)

かけろふのゆうさりくれは かりひとのゆみえかた
にかすみたなひく (西・一二五)

かけろふのゆふさりくれは かり人のゆみいるかた
にかすみたなひく (書・八)

かけろふのゆふさりくれは かり人のつきゆみたか
み霞たなひく (陽・四)

⑧春霞 流共尔 青柳之 枝喙持而 鶯鳴毛

(萬葉集・二八二二)

はるかすみわかれてともに あをやきのえたくひも
ちてうくひすなきつ (西・一二四)

はるかすみわかれてともに あをやきの枝くひもち
てうくひすなきつ (書・七)

春かすみわかれてともに 青柳の枝くひもちて鶯な
きつ (陽・八)

③の第二句は現行訓「やまのまてらす」が本文に即して適切と見られるが、『赤人集』は三本ともに「やまのはてらす」とする。当該句は、たとえば元暦校本、類聚古集といった平安時代の伝本が「やまへをてらす」と訓んでいるように、漢字に即応しない本文が『赤人集』にみえること自体は問題としない。しかし、三種の本文が個々に訓まれた結果と考える場合、漢字と即応しない「やまのは」は不審である。

④の結句「所言之吾背」を赤人集歌が「いひしわかこと」と訓むのも、偶然の一致とは見做しがたい例で

ある。何故末尾が「こと」に変化したのか、明解はえがたいが、歌意は「おみなえしが咲いている野辺に生えている白つつじではないが、身に覚えのないことで私のことを言い立てたよ」（和歌大系）と解してとくに無理はない。しかし、訓読の結果とみると不自然であり、このような本文が個別に生成される可能性はひくいだろう。⑤の第三句「春野庭」を「はるののに」とするのも、個々人の訓読がたまたま一致した結果とは考えにくいものである。

⑥はさらに特異な例といつていい。下二句の訓が定まらない難訓歌であり、妥当な訓みを提示することは困難であるが、赤人集歌が漢字と即応していないことだけはたしかである。もっとも結句の「とくと」については、『類聚名義抄』（図書寮本、観智院本¹³）や『大唐西域記』平安中期点¹⁴に「磨」を「トグ」と訓む例もあるから、訓読の結果がたまたま一致したと考えられないこともない¹⁵。しかし、第四句「かゝるわかれば」を「神競者」の訓読とはみとめがたく、「意識」された本文といつていい。漢字を「意識」することは『萬葉集』自体の附訓にも例があるが、『赤人集』各系統の編者がそろっておなじ「意識」に行きつくとは、やはり考えにくいのではないか。

⑦は獵師の意である「佐豆人」を、意味から推して「かりひと」と訓んだ例である。「かりひと」ということばは

『和名類聚抄』の「獵師」の訓に「加利比度」（真福寺本）、「加利比止」（伊勢本、元和本）とあり、『名義抄』（観智院本、蓮成院本、高山寺本）にも「獵者 カリヒト」とみえる。歌語の例としても、「かり人のたづぬる鹿は いなび野に逢はでのみこそあらまほしけれ」（『後撰和歌集』恋六・一〇〇九・読人しらず）とあり、ある程度、平安時代に通用していたことばらしい。対して、「さつひと」はこの時代にほとんど例のないことばであるから、義訓「かりひと」が生じたこと自体は理解できる。しかし、「佐豆」という萬葉仮名表記に対する訓としては順当でなく、奇異の感は否めない。

最後の⑧は「流」を「わかる」と訓む例である。訓読という観点からみると赤人集歌は異様であるが、平安時代の和歌に霞を「ながる」と詠む例がとほしいことを考慮して、「意識」したと考えられる。対して、「かへる山ありとはきけど 春霞立別れなばこひしかるべし」（『古今集』離別・三七〇・紀利貞）、「春霞はかなくたちてわかるとも 風より外にたれかとふべき」（『後撰集』離別・一三四二）、「春霞たちわかれゆく 山みちは花こそぬさとちりまがひけれ」（『拾遺集』春・七四）のように、霞を「わかる」と詠む例は、三代集に見出すことができる²⁰。

もちろん、いずれも「立ちわかる」の例であり、直接に

は「たつ」が霞と呼応しているとみるべきだが、それでも「わかる」とある点は見逃せない。おそらく『赤人集』編者はこのような例により、「ながる」よりも「わかる」の方が霞の述語としてふさわしいと判断したのであろう。しかし「意識」であることは事実であり、複数人がおなじ結論にいたる可能性は低いといってよい。他にも、以下のような例が散見する。

⑨ 「鬱之思者」(一八一三第四句) ……「はれぬおもひは」(陽・二二)、「はれぬ思ひに」(書・五)

⑩ 「戀八九良三」(二九二五結句) ……「恋やわたらん」(陽・九六)、「こひやわたらん」(西・二〇六、書・八七)

⑪ 「藤者散去而」(一九七四第二句) ……「藤はちりにき」(陽・一四二)、「ふちはちりにき」(西・二四九、書・一二九)

⑫ 「隠耳」(一九九二初句) ……「ひとしれす」(西・二六六、陽・一五九、書・一四六)

このように、『萬葉集』の漢字と即応しない本文が『赤人集』三系統に共通してみとめられる場合は少なくない。三系統間の本文異同が真名本を個別に訓読したことにもとづくとする、これらは不審な例である。『赤人集』祖本に仮名文が存し、現行本文はそこから展開したと考えない

と、説明がつかないのではないだろうか。

二 西本願寺本の形態

それでは『赤人集』の祖本はどのような形態であったと考えるべきなのだろうか。ここまで、『赤人集』三系統の本文が訓みわけの結果成立したとする説に対して疑義を呈してきたが、その一方で、『赤人集』と『萬葉集』巻十前半部の排列等が一致する以上、『赤人集』(ないしはその原型)は、いずれかの段階までは確実に真名本であったとみられる。とくに西本願寺本の「滓鹿」を「シカ」とする例などは、愚直に真名本文を訓読した結果とみると、非常に理解しやすいこともたしかである。

同本は天永三年(一一一二)以前に書写された現存最古写本であるから、現存本以前の段階を考えるにあたってとくに重要な伝本といつてよい。また、西本願寺本と書陵部本には卷十相当歌以外に『萬葉集』の赤人作歌四首が増補されている⁽²³⁾、巻頭附近をはじめ『萬葉集』と排列の異なる部分⁽²⁴⁾が六ヶ所あるなど、三系統のなかでも共通点が多いが、その一方で、西本願寺本は書陵部本末尾の重複歌をふくむ増補歌群(二三五〜二五一)を缺いており、卷十相当歌群については比較的古態をとどめていると考えられるから、同本と『萬葉集』真名本文とのつながりを検証する価値は

充分にあるだろう。

ただ、既述のとおり『千里集』と巻十前半部に相当する二種の歌群で構成された特異な伝本でもあり、書陵部本、陽明文庫本には存しない『千里集』相当歌群をどのように把握するかが、西本願寺本の古態性を考えるうえでやはり問題となる。また、従来の『赤人集』研究では、どちらかといえば巻十相当歌群が注目される場合が多く、『千里集』相当歌群は十分に検討されていない感もあるのである。⁽²⁶⁾『和歌文学大辞典』(日本Web図書館)によって『千里集』の概略を確認し、検討をくわえたい。

寛平六894年の自序によれば、「宇多天皇から和歌を献じるよう勅命を受け、漢詩の名句を探して、それによる和歌を新作し、最後に自詠十首を加え、献呈する」とある。現存伝本は一二五首。「不明不暗朧々月／てもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜ぞめでたかりける」(『千里集全釈』七一)のように、五言または七言の詩句と、和歌が交互に示される。……なお、平安期に、題を除いた和歌だけのかたちの集積があり、その断片百首余りが『赤人集』として伝わる(西本願寺本赤人集)。

右記のとおり、『千里集』は「五言または七言の詩句と、和歌が交互に示」される特異な形態をもつ歌集である。こ

の点も『赤人集』との関係で重要だが、まずは、従来あまり注意されることのなかった『千里集』の部立について考察する。

秋部

天漢迢々不可期

あまの川ほどのはるかに成ぬれば あひみることのかたくもあるかな

『千里集』をみると部立が六ヶ所に冠されている(傍線部)。そして、西本願寺本を確認すると、この部立が句題とは異なり、二ヶ所のみとはいえ残存しているのである。

イ、秋部(『千里集』三五、三六の間)……『赤人集』

ナシ

ロ、冬部(同五六、五七の間)……同ナシ

ハ、風月部(同六八、六九の間)……同「かせのふく」

ニ、遊覧部(同七九、八〇の間)……同ナシ

ホ、離別部(同九二、九三の間)……同「わかこふ」

ヘ、述懐部(同一〇四、一〇五の間)……同ナシ

まず『赤人集』に部立が残存するハとホをみると、文言は大きく相違している。とくにホの相違が著しいが、「本文においてももちろん欠陥が多い」、「本文が乱れに乱れている赤人集」と指摘されるとおり、『赤人集』はきわめて誤写の多い歌集であり、ここもその一斑と考えることは可

能であろう。なによりも、二ヶ所にかぎって部立を後補するとは考えにくく、排列も『千里集』と一致する以上、「離別」が「わかるる」などと訓読され、それを誤写したとみるのが妥当である。あるいは、この部立の直後に排された四五番歌の上二句「なくなみだこふるたもとに」に誘引された可能性もあるだろうが、いずれにせよ、後捕されたとは考えにくい。また、脱落する四例についても事情を推察できる場合が多い。まず二とへに関しては、以下のように『赤人集』が前後いずれかのうたを缺いている。

二、千里集……76・77・78・79・遊覧部・80

西本願寺本……30・抄・抄・部立ナシ・31

へ、千里集……104・述懐部・105・106

西本願寺本……95・部立ナシ・抄・96

この脱落状況をかんがみると、二は七七・七九番相当歌へは一〇五番相当歌に巻き込まれ、脱落してしまった可能性が高いだろう。さらに口に関しても、排列と部立の脱落が密接にかかわっていると考えられる。口の部立を冠する『千里集』五六、五七番歌の前後は、西本願寺本で以下のような排列となっているのである。

西本願寺本……77(千55)・78(千56)・79(千23)・

80(千57)・81(千58)

部立の存在が期待される七八、八〇番歌(傍線部)のあ

いだに、『千里集』二三番相当歌が七九番歌として入り込んでいる(波線部)のが、西本願寺本の排列である。右の挿入がいかなる事情にもとづくかは不明であるが、部立の脱落はこの排列の移動によるのではないか。あるいは当該例については、歌意が脱落をうながした可能性もある。

なくせみのこゑたかくのみきこゆるは のきふくかせ
のあきそしるらし (西・七九)

「秋ぞ知るらし」と晩夏を詠む当該歌が、「冬部」という部立の文言とつりあわないことはあきらかであり、この口に関しては、脱落の理由は排列、内容のいずれとも考えられる。残るイには脱落する積極的な理由を想定しえないが、四例中三例までに脱落する蓋然性が想定できる以上、『千里集』相当歌群は本来、部立をともなっていたと考えていいだろう。すると、『千里集』相当歌群は『千里集』から「題を除いた和歌だけのかたちの集積」というよりも、「部立、句題、和歌のうち句題を削除した歌群」と認定できる。

以上のように『千里集』相当歌群の成立を再検証したうえで、あらためて前節までの巻十相当歌群の検証結果を確認しておきたい。『赤人集』には『萬葉集』の真名文を「意識」したと判断しうる、訓みわけの結果とは考えにくい共通本文が複数存在しており、三系統の背景には、原形にあたる仮名文の存在を想定すべきとみられる。しかしそ

の一方で、『赤人集』が本来真名書きである『萬葉集』の卷十前半部と、題詞等もふくめ同様の排列を持つ以上、『赤人集』が真名本に由来することもたしかである。

それでは、『赤人集』における仮名と真名の関係をどのように把握すべきか。この『萬葉集』卷十から『赤人集』への変遷を考えるにあたっての重要な問題を解く徴証は、最前まで検討してきた、最古写本である西本願寺の形態、より具体的には『千里集』相当歌群と合冊されていることにあるようにおもう。従来、卷十相当歌群と合冊されている歌集が『千里集』であるという点に関して、それほど注意は払われていない。しかし、『千里集』が句題と和歌をとりあわせるといふ、めずらしい形式であることは、『赤人集』との関係を考えるうえで、もつと注目されてよい事実ではないだろうか。

さきに結論から述べれば、『千里集』相当歌群と卷十相当歌群がひとつの歌集と誤認された大きな理由は、両者の外観の近似によるのではないかと、いうことである。つまり、西本願寺本は部立と和歌だけを残した『千里集』と、仮名書きの卷十相当歌群がたまたま接合されたのではなく、『千里集』は句題を、卷十抄本は真名文を、それぞれ保持した状態であったために外観が似通っており、同一の歌集と誤認されたのではないだろうか。さらに推定をすすめる

ば、漢詩と和歌を組み合わせる句題和歌と混同されたとすると、その卷十抄本は附訓本であった可能性がたかい。だからこそ誤認されたのだろう。

近時の『萬葉集』附訓形式の研究からも、この推定は補強できる。漢文訓読史と『萬葉集』の附訓形式の研究史をふまえると、平安時代のはやい段階における附訓は平仮名別提訓形式であったとみられるからである。右から左に題詞、真名文、附訓の順でならば、しかも訓が平仮名で書かれるこの形態は、部立、句題、和歌の順で並ぶ『千里集』の形態と符合する。西本願寺本の合冊は偶然の結果などではなく、外観の近似する『千里集』だからこそ、卷十相当歌群とむすびついたと考えてよいのではないか。

両者は如上の事情によってひとつの歌集と誤認され、さらに和歌集としては不要な句題と真名文を削られることで、現在の姿にいたったのであろう。題詞や部立もおなじ折に訓読された可能性がたかい。その編集をおこなったのは、「本ノマ、」という注記を十三箇所にわたって施す慎重な書写態度から判断するに、西本願寺本書写者ではあるまい。いつとは不明だが、それ以前の段階で現在の形態に改訂されたとおぼしく、西本願寺本自体は合冊された後の写本を忠実に書写したとみられる。そして、合冊される以前の段階では、『赤人集』は平仮名別提訓本として流布していた

のであろう。そうであるからこそ、『千里集』と取り合わされるという奇妙な事態を招くことになったと考えられる。

三 西本願寺本の漢字使用率

ここまで、西本願寺本の形態が元來『赤人集』が平仮名別提訓本として傳來していたことを示唆しており、またそのうであるからこそ、句題形式の歌集である『千里集』と合冊されるにいたったのではないかと論じてきた。

この推測をさらに補強するために、本節では西本願寺の漢字使用率に注目する。『赤人集』をふくむ西本願寺本三十六人集の漢字使用率を網羅的に調査した松本瑛子の研究³³によると、三十六人集全体の漢字使用率が六・六%であるのに対して、『赤人集』は一%とひくい。三十六人集には『興風集』(二%)、『業平集』、『忠岑集』(二・五%)など、ほかにも漢字を頻用しない歌集がいくつかあるが、なかでも『赤人集』は極端に少ない³⁴。また、その漢字の使用傾向は以下のように説明される。

一体に複雑な文字を避ける傾向があり、漢字においても山・人・月など画数の少ない、ごく簡略な文字しか使用していない。一般に歌中でもよく使用される「花・春」などの単語自体は赤人集でも頻出するにかかわらず、ほとんどが仮名で書かれ、漢字は上記の使

用数にとどまっている。

指摘されるとおり、『赤人集』にはごく簡単な漢字しか使用されない。しかも、漢字が使用されている個所を確認していくと、実際の使用率は松本の調査よりもさらに低下するとおぼしい。さきに松本の調査結果を提示する。

人・山(18) 秋(14) 日・本(13) 花(6) 丸・集(5) 心・月(4) 風・身(3) 君(2) 河・木・霧・昨・立・給・中・野・春(1)

合計二十二種一七字あるが、この数量を額面どおりには受け取れない。まず「日」を十三例とするが、この字は墨水書房の複製本で確認しても、漢字か仮名の字母か判定しがたい場合が多い。実際、『新編私家集大成』では六字、『新編国歌大観』では九字と認定されており、認定者如何によって、多少の揺れを避けることのできない例といつてよい。本稿では、ひとまず『新編私家集大成』によって六字でカウントしておく。

この「日」についてはややあいまいさを残すが、以下は、西本願寺本の卷十相当歌群が平仮名別提訓から生じた可能性を検証するという本稿の目的からすると、確実に除外しておくべき例である。

A、『萬葉集』卷十の詞書、左注相当個所での使用例
………五字

漢字	漢字数	A	B	C	D	E	卷十相当歌
人	18		4		5		9
山	18		6				12
秋	14		4				10
本	13			13			0
日	6	1				1	4
花	6		1				5
丸	5				5		0
集	5				5		0
心	4	1	3				0
月	4	1					3
風	3						3
身	3		3				0
君	2						2
河	1						1
木	1						1
霧	1						1
昨	1					1	0
立	1						1
給	1						1
中	1	1					0
野	1	1					0
春	1						1
合計	110	5	21	13	15	2	54

卷十相当歌群漢字使用数一覧

B、『千里集』相当歌群の使用例……二十一字
 C、「本ノマヽ」、「本」という書写者による注記中の使用例……十三字
 D、一九五、二六〇、二六五、二六八、三三三番歌に附された「人丸集」注記での使用例（『萬葉集』卷十にない注記）……十五字
 E、萬葉集赤人作歌中の使用例……二字
 Aは『萬葉集』の漢文に相当する箇所であり、B～Eは卷十抄本に増補された部分と判断できるから、いずれも除

外すべき例である。このA～Eの五種五十六字を除外し、卷十相当歌のみの漢字使用数を計算すると、左の表のとおりとなる。

以上の計算にもとづく五十四字を、西本願寺本のうち卷十相当歌群（詞書、左注をのぞく）の総字数約七四五〇字で割ると、約〇・七二%となり、松本の提示した数字よりもかなり低減する。仮名書き歌集のなかでも極端にひくい数字で、特異な傾向をしめしているといつていい。この数字は『赤人集』は本来平仮名別提訓本ではなかったかと

いう本稿の仮説にとって興味ぶかい。それは、『萬葉集』の附訓も、当然といえば当然ではあるが、漢字をほとんどもちいずに記されるからである。もちろんこの徴証のみならば、西本願寺本書写者が漢字を好まなかつただけとも考えられる。しかし前節でもふれたように、「本ノマ、^①」という注記からは、書写者の親本の形態を保持しようとする意識を看取できるから、表記にそれほど手が加わっているとは考えにくい。

また、実際に平仮名別提訓本と比較しても、使用率の近接は確認しうる。平仮名別提訓本のうち、類聚古集附訓の漢字使用率については、総字数一・一万二五九三字に対して、漢字数が四八一字、漢字使用率は〇・四三％である^②と木村雅則に報告があり、この率は西本願寺本にちかしい^③。前節までの論証をふまえれば、この使用率の近接は『赤人集』が平仮名別提訓を抜き出したことに由来する可能性がたかいたってよいのではないか。極端な仮名偏重の表記は、それを示唆していると見做せよう。

おわりに

ここまで、①『赤人集』三系統に仮名文の潜在をうかがわせる共通本文が存在すること、②句題形式である『千里集』と平仮名別提訓本『萬葉集』との外観の近似が、西本

願寺本合冊の要因であろうこと、③西本願寺本の漢字使用が類聚古集の附訓に比するほど低率であることという三点から、『赤人集』が西本願寺以前の段階では、平仮名別提訓本であつたろうと論じてきた。以上の論証は、『萬葉集』の伝来、流布という面からみれば、巻十前半部の抄本が、附訓本としてある程度流布していたことを示唆している^④。

なお、本稿では西本願寺本を主たる検討対象としたため、書陵部本、陽明文庫本との関係については射程に入れることができなかった。この点については別に論じる予定であるが、ひとまず上述の点を確認し、本稿を終える。大方のご批評を仰ぎたい。

注

- (1) 小川靖彦「天曆古点の詩法」(『萬葉学史の研究』(第二刷))おうふう・二〇〇八、一九九九
- (2) 後藤利雄「古今和歌六帖の編者と成立年代に就いて」(『國語と國文學』第三十卷第五号・一九五三)、『六帖』の成立時期に関しては、後藤が入集歌にもとづいて提示した貞元元年(九七六)をさかのぼるとの見方もある(山岸徳平「平安時代の文学と萬葉集」『萬葉集講座』第四卷、春陽堂・一九三三、など)が、『拾遺集』成立以前の編とみる点は共通するので、とくに穿鑿しない。
- (3) 『入麿集』は諸本間の相違が著しく、系統によって成

立の推定時期は相違する。しかし諸本中もつともはやく成立したと考えられる上巻六十三首（藤田洋治「人麿集」『和歌文学大辞典』）をふくむ書陵部本系統を「拾遺集」以前の成立とみることは、後藤「人麿の歌集とその成立」（至文堂・一九六一）、阿蘇瑞枝「人麻呂集・赤人集・家持集」（明治書院・二〇〇四）といった先行諸研究に共通している。

(4) 竹下豊「解題（赤人集）」（『新編私家集大成』日本文学大系 図書館）、藤田「赤人集」（『和歌文学大辞典』）

(5) 第二類本は書陵部蔵本の親本にあたる資経本「山辺集」が存するので、「資経本系統」とすべきであるが、前掲(4)竹下の分類にしたがっておく。

(6) 以下の記述は、後藤「假字萬葉と見た赤人集及び柿本集一部——私家集の成立に関する考察——」（『國語と國文學』第二十七卷第二号・一九五〇）、山崎節子「赤人集考」（『國語國文』第四十五卷第九号・一九七六）、同「陽明文庫（二〇・六八）「赤人」について」（『和歌文学研究』第四十七号・一九八三）をふまえる。

(7) 4に関する研究史等は、拙稿「萬葉集」伝来史上における『赤人集』の位置」（『古代中世文学論考』第三十集・新典社・二〇一四）に詳述した。

(8) 前掲(6)の山崎「赤人集考」、同「陽明文庫（二〇・六八）「赤人」について」

(9) 山崎説の引用は前掲(6)山崎「赤人集考」による。また、以下の萬葉歌の引用は塙書房CD-ROM版により、

本文、附訓は『校本萬葉集』を参観した。なお、引用歌①②のうち、④以外に特筆すべき本文異同はない。その④の第三句「白管自」は元暦校本、類聚古集、廣瀬本が「白菅自」に作り、紀州本以下の片仮名傍訓本と対立する。元暦校本以下は「しらすげの」と訓むが、「自」を「の」と訓むのは適切でなく、書写年代は下るが、紀州本以下の本文が妥当であろう。『赤人集』は、元暦校本以下が誤写する前段階の本文を反映している可能性がたかい。

(10) たとえば素寂本「人麿集」をみると、山崎の引く二首が書陵部本と同形で存する。「赤人集」自体、本文に問題の多い歌集であり、どれと特定することは困難だが、別資料を参照した可能性も十分に想定しうる。

(11) 私家集の引用は『新編私家集大成』により、表記は適宜あらためる。

(12) 現行訓「いはれしわかせ」では変遷の過程が理解しにくいのが、旧訓「いひしわかせこ」（元暦校本、類聚古集など）ならば、「世己（せこ）」から「古止（こと）」への誤写を想定することは比較的容易である。

(13) 草川昇編『類聚名義抄和訓集成』(三)（汲古書院・二〇〇一）

(14) 築島裕編『訓點語彙集成』第五卷（汲古書院・二〇〇八）による。

(15) 元暦校本、紀州本が「ときまたなくに」と訓むように、清濁を無視すること自体は、平安時代の訓読のありよ

うとしてさほど特異ではない。

- (16) 前掲(1)
- (17) 馬淵和夫編『古写本和名類聚抄集成』(勉誠出版・二〇〇八)、前掲(13)
- (18) 次点本の附訓をのぞくと平安時代の和歌に「さつひと」の確例はない。
- (19) 『萬葉集』の訓点をのぞけば、十二世紀初頭の『肥後集』以前に例をみない。
- (20) 勅撰集の引用は『新編国歌大観』(日本文学ライオン図書館)による。
- (21) 西本願寺本は当該歌の下二句を缺く。
- (22) 久曾神昇『三十六人集』(塙書房・一九六〇)、新藤協三『三十六人集』(『和歌文学大辞典』)
- (23) 卷三・三二五、卷六・九一九、卷八・一四二四、二七の四首。
- (24) 前掲(6) 山崎「赤人集考」に詳論があるので、ここでは指摘するにとどめる。
- (25) このうち書陵部本の成立については、西本願寺本から『千里集』相当歌群を削除し、末尾十五首を増補したと考えると理解しやすい。しかし、書陵部本増補部は陽明文庫本祖本系統に依拠するという藤田「三十六人集の本文改訂試論——陽明文庫(サ・六八)本を中心に——」(『和歌 解釈のパラダイム』笠間書院・一九九六)の指摘によれば、陽明文庫本系統の成立は十三世紀末写の資経本(書陵部本系統最古写本)以前となり、
- 『萬葉集』との排列の近似や、赤人作歌四首を缺く点も考慮すると、平安時代までさかのぼる可能性も否定できない。すると、書陵部本系統の成立も陽明文庫本系統との関係を念頭におく必要がある、如上の理解も推測にとどまる。
- (26) 後藤「赤人集及び兩千里集の研究」(『万葉集成立新論』桜楓社・一九八六)や前掲(6) 山崎「赤人集考」といった先行研究があるが、本稿とは視点を異にする。
- (27) 平野由紀子「千里集」(『和歌文学大辞典』)
- (28) 片桐洋一・山崎「解題(赤人集)」(『新編国歌大観』)
- (29) なお、四五番歌に代表されるように、離別歌は一般に別れた相手を恋い慕う内容を持つから、「離別」を「わかこふ」とするのは意図的な「意識」の可能性もあるが、ひとまず誤写と判断しておく。
- (30) 築島「万葉集の訓法表記方式の展開」(『國語と國文學』第五十六卷第七号・一九七九)、前掲(1) など。
- (31) 田中大夫「長歌訓から見た万葉集の系統——平仮名訓本と片仮名訓本——」(『和歌文学研究』第八十九号・二〇〇四)など、田中の一連の諸本研究による。
- (32) 平仮名別提訓本から「赤人集」が派生した可能性については、前掲(7)の拙稿でも別の観点から論じた。
- (33) 松本瑛子「西本願寺本三十六人集の字彙」(汲古書院・一九九八)
- (34) 『躬恒集』三三一以降の漢詩七首をのぞくと、全体の率は六・二%とやや低下する。ただし、以下で詳述す

るとおり傾向に大きな変化は生じない。

- (35) 西本願寺本三十六人集は寄合書きであり、『赤人集』書写者(第六筆)と同筆の文献がみあたらない点に問題はあるが、関戸本『古今集』のような代表的な仮名歌集の漢字使用率(二・九%)と比較してもとりわけひくい。なお、関戸本の使用率は川村滋子『変体がな実用字典 関戸本古今集』(同朋社・一九九二)による。

- (36) Dの注記に関しては、景井詳雅『人麿集の万葉集享受——一類本上巻の場合——』(『和歌文学研究』第九十五号・二〇〇七)に、一類本人麿集との校合にもとづくとの指摘があり、追認すべきと考える。

- (37) 木村雅則「訓み本文の表記からみた『類聚古集』——漢字表記を中心に——」(『国文学論叢』第四十六輯・二〇〇一)

- (38) 書陵部本や陽明文庫本は西本願寺本よりも漢字表記が多く、殊に陽明文庫本の使用率は一割を超える。平仮名別提訓本を『赤人集』の原形とみる本稿の趣旨と矛盾するようだが、これは二本の書写年代がくだるためであるう。とくに陽明文庫本は中世末期の写本であり、書写の過程で漢字数が増加していったと考えられる。

- (39) 新沢典子「古今和歌六帖と万葉集の異伝」(『日本文学』第五十七巻第一号・二〇〇八)では、卷十二の異伝歌の調査から、卷十二が抄本として流布した可能性を論じている。卷十に關しても同様に考えられるのではないだろうか。

※本稿は国文学研究資料館共同研究「万葉集諸本の書写形態の総合的研究」(代表・田中大士)第二回研究会での発表を骨子とする。席上でいただいた種々のご指導に、記して御礼申しあげる。また末筆ではあるが、成稿にあたって藤田洋治、小川靖彦両先生にご教示いただいたことを附記し、謝辞にかえたい。なお、本稿は平成二十六年度井上円了記念研究助成の成果の一部である。